
新潟県中越沖地震

(熊谷 謙、石原晋ほか・監修 プレホスピタルMOOK 9 DMAT、東京、永井書店、2009、303-309)

2011年12月9日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

DMAT (Disaster Medical Assistance Team 災害派遣医療チーム) とは、災害発生時、「防ぎ得た災害死」を1人でも少なくするため、「災害現場活動」「重症患者の域内域外搬送」「被災地内医療機関支援」を主とする超急性期の災害医療を展開する医療チームのことである。

DMAT 活動の概略

- ・平成17年に日本DMAT 隊員養成研修が開始された2年後の平成19年7月16日午前10時分、新潟県中越沖を震源とするマグニチュード6.8、最大震度6強の地震が発生。この地震はDMAT が組織的に活動した初めての事例となった。
- ・DMAT はほかの医療支援班と協力しながら災害拠点病院支援、災害現場活動、域内患者搬送を行い、また現地災害医療本部の立ち上げにも参画したほか、豊富なマンパワーを活かして救護所診療、避難所巡回診療にも加わった。
- ・DMAT 内部では統括DMAT 以下しっかりとした指揮命令系統が構築され組織的な活動ができたが40チームものDMAT が活動していたので統括業務は先着DMAT 一隊には過負荷でありエキスパートのサポートが不可欠であった。
- ・消防との連携においては統括DMAT が病院に派遣された消防責任者と常にそばにいて共同しつつ、それぞれの組織を指揮できたので、作戦イメージの共有、情報交換、搬送車両の手配、現場派遣などにおいてメディカルコントロールを管理しつつ非常に円滑かつ有効に機能した。
- ・病院職員やほかの支援班にDMAT の活動内容についての予備知識がなかったため、役割分担や急性期医療終了後の引継ぎ体制構築などに支障が出た部分も見られた。
- ・DMAT 活動要領によればDMAT は被災都道府県の要請により出動することになっているが、今回新潟県からのDMAT 派遣要請は発災から3時間以上経過した後であり、既にDMAT が現地で活動を開始したころであった。中越沖地震においてDMAT の機動力と急性期での有用性が実証されたが、その長所を生かすために迅速なDMAT 派遣要請が望まれる。
- ・災害医療活動といえば不眠不休という言葉を連想するが、今回は多数のDMAT が参加したため、交代性で活動することができた。
- ・緊急車両の参集は公安委員会届け出の4割だけであった。車両不足を補うためにDMAT の救急車で患者を搬送した例もあったが一般車両では渋滞や通行規制にかかり到着が遅れたなどの事例があり、DMAT の移動手段について課題が指摘された。

まとめ

阪神・淡路大震災など多くの災害の教訓を得て整備されたDMAT であるが、中越沖地震では災害拠点病院支援と域内搬送を中心に一定の成果を上げ期待通りの実力を発揮できたといえる。しかしそれには大地震という広域災害でありながらも重傷者が少数であったこと、DMAT の活動場所が一極集中して組織構築や通信の負担が少なかったこと、DMAT と被支援病院職員やほかの医療支援班が地元の既知の間柄であり連携が円滑であったことなど幸運が重なったことも大きく影響していると考えられる。

中越沖地震におけるDMAT 活動には参集、統括、病院支援、域内搬送、現場活動、ドクターヘリとの連携などの要素が網羅され小規模ではあるが実際に行われた。そこから多くの問題点や課題が抽出され、平成19年度厚生労働科学研究「健康危機・大規模災害に対する初動医療の在り方に関する研究」の検証を経てDMAT 隊員養成研修や統括DMAT 養成研修の改定を通じてDMAT のさらなる向上に役立った点でも意義が大きかったといえる。